

海と山でかなえた憧れの生活

男の隠れ家

2005
November
定価680円

隠れ家美食倶楽部
リゾート気分を味わえる
縁に囲まれた名店

わがままな
暮らし

海と山で見つけた

わがままな家





藏本光喜 (くらはもと・みつぎ)
1952年生まれ。92年、横浜から秋田へ移住。大手楽器メーカー勤務。妻と子ども3人の5人暮らし。移住経験を生かし、「田舎暮らしアドバイザー」として年間数組の移住希望家族をアシストしている。

典型的な企業戦士だった僕が都会脱出を夢見るようになったのは20年ほど前のこと。「家族との時間を大切にしたい」「都会を脱出したい」という思いが募り、まずは予行演習にキャンプを始めたのでした。

たかがキャンプ、されどキャンプ。我が家族初の共同作業で妻は昔の陽気さを取り戻し、子どもたちは僕を尊敬のまなざしで見つめます。やがて眠りにつく頃には、感謝の気持ちで一杯に。こんなに価値ある時間を過ごしたら、もう昔の僕には戻れません。

それからというもの、移住への夢は膨らむばかり。毎日地図を広げているうち、ふと「秋田内陸縦貫鉄道」という文字を見ですっかり気に入ってしまいました。そこで僕は初めて妻に移住したいことを打ち明けたのでした。

「え？ うそ？ ……でもいいよ」意外にもあっさり一発了解。こちらが拍子抜けするほどでした。ところが、ここからが葛藤の日々。自宅は売り払った方がいいのか、賃貸に回した方がいいのか。収入は半減するはずだし、不便になることは間違いない。本来は華やかで賑やかな雰囲気が好きで自分もいたりして、自分の求めているものが本当に田舎暮らしにあるのか、それは住んでみなければわからない。今まで積み重ねた仕事の経験だって無駄になるかも

しれない。都会で暮らす子どもは否応なく競争社会に巻き込まれてしまうけど、大人になれば競争社会は当たり前前。頭をよぎるのはマイナス要素ばかり。

そんなある日、僕はキャンプ道具をクルマに積み込み、ひとり山奥でテントを張りました。初秋の寒さは想像以上のもの。そこで今まで考えてきたことを整理し、ノートに書き記しました。自分の迷いにトドメを刺す積もりでした。移住にあたってくりアセねばならぬ問題をいつまでに解決するのか、それを明確に書き付けたのです。

こうして悩みは吹っ切れましたが、夢を実現するのに重要なのは、まず何をしておいても収入の確保。僕は帝国データバンクから秋田県の資料を取り寄せて片っ端から調べました。すると、某大手楽

悩み多き移居前夜の葛藤。

文◎藏本光喜



イラスト◎松本よしえ

器メーカーの会社があるではありませんか。学生の頃から楽器を手放したことが一度もない僕。早速、電話を掛けてみました。

「突然で申し訳ありませんが、御社ではいま社員を募集していますか」

こう言うと、いきなり総務部長に回してくれました。そしてアポイントを取り付け、その年の冬、家族のスキー旅行を兼ねて秋田を訪れました。総務部長、生産部長、代表取締役が迎えてくれ、なんとその場で即座に採用決定。何か不思議な力が後押ししてくれた気がしてなりません。仕事が決まれば次は住まい。町役場を訪れると、ちょうど3LDKの住宅の空きが出て、入居募集するという。一戸だけなので難しいかな、と思っていると、担当者が耳元で、「何とかなるでしょう」

希望者は3人で、鉛筆4本を使った独特の抽選方法の結果、僕が見事当選。真相は数の中ですが、担当者が何か裏技を使ってくれたのでしょうか。

ともかく、こうして職と住の問題を解決した我が一家は、家族5人で東北自動車道を通って秋田県入り。念願の移住を成し遂げたのでした。移住までにはたくさん葛藤がありました。家族の理解と信じられない幸運が僕らを後押ししてくれたのだと思っています。

◆ 田舎暮らしは
雑草との闘いである

油断していると庭を埋め尽くし、
女関先まで占領する雑草。ひと雨降
って、翌日晴れたりしたら、もう始
末に負えない。田舎で雑草だらけの
家は不精者として蔑まれるし、嫁は
怠け者と陰口を叩かれる。雑草は根
っこから引き抜くのが一番だが、そ
れをやっていたら腰がもたない。土
地は自分のものでも風景はみんなの
もの。わかつてはいるけれど、雑草
との闘いはいつも惨敗となりがちな
移住組。

◆ 「コロツケ買いに行く？」
で90分

田舎で近所付き合いが親しくなる
と、突然のお呼ばれやお誘いが当た
り前。道を歩いていて、クルマで通
りかかった主婦に「おいしいコロツ
ケ買いに行くけど、一緒に行く？」
と誘われ、気軽に乗り込むと、なん
とクルマで40分以上かかる隣町の
精肉店だった。往復90分かけて手
に入れたコロツケは、それはそれは
おいしかったけれど――。

◆ カラオケは演歌しばり

頻繁にある寄り合いが終わると、
カラオケスナックに繰り出すことが
多々ある。が、みんなが歌うのは演
歌ばかり。一番人気は北島三郎、二

移住前に 知っておきたい 田舎の常識

いざ移住してみ
て「こんなはずでは……」と
ならないために、
都心から見事移住を果たした
前出の榊島弘文、藏本光喜両氏に、
気になる「田舎暮らし事情」の
エピソードを披露してもらおう。



イラスト◎松本よしえ

◆ あちらを立てれば
こちらが立たずの家庭菜園

都会からの移住者が「とにかく田
舎でやりたいこと」のナンバー1が
家庭菜園。手に入れた庭でクワでも
振るおっものなら、近隣の農業のプ

口たちが放っておかない。それは親
身にアドバイスしてくれ、その人が
「師匠」となる。田舎の人はやはり
親切だ。しかしここから問題。「師
匠」はひとりとは限らず、次々と現
れる。だが野菜作りはそれぞれに流
儀があつて、やり方が微妙に違う。
「師匠」たちのアドバイスを全部聞
いていると、どちらに従っていいも
のやら戸惑うばかり。船頭多くして
何とやら、とならなければいいのだ
が、やはり新参者としてはみんなの
顔を立てたいところ。しかしそんな
師匠たちも口を揃えて言うことがあ
る。「素人に無償栽培は絶対ムリ」。
よく覚えておこう。

◆ 転職先が少ない
田舎の厳しい職場事情

働き口が少なく、超買い手市場が
当たり前になっている地方では「上
司や会社に逆らっては生きていけな
い」という心理が都心よりも濃厚だ。
だから理不尽なことにも目をつむる
会社員が多く、上役も「どうせ辞め
られないんだから」と傲慢になりが
ち。昇進は昔ながらの年功序列で、
これが若者の田舎離れにも拍車を掛
けている。新米上司がいきなり「人
生とはなんぞや」と語り始めたとい
う笑えない話も聞く。都会でも多か
れ少なかれ共通する話ではあるが、
地方ではその弊がより強いみたいだ。